

Vision for the future. 4

舞台は世界 | グローバルに活躍する「会計プロフェッション」たち



日本公認会計士協会

The Japanese Institute of Certified Public Accountants

Contents

○ Interview 01 02

有限会社アキュレイ 代表 / 東急不動産ホールディングス株式会社 社外取締役 /
大日本住友製薬株式会社 社外取締役

新井 佐恵子

会計を木の幹に、実りある大きな枝葉を広げて好奇心と
探求心を原動力に自分の可能性を広げてきた

○ Interview 02 05

EY 新日本有限責任監査法人 マネージャー
財務会計アドバイザー
(Financial Accounting Advisory Services :FAAS)
Japan Business Services (JBS) 海外デスク インドネシア担当

内藤 玄太郎

“アドベンチャー会計士”の冒険の旅
～専門性が未来の可能性を広げる～

○ Interview 03 09

有限責任 あずさ監査法人 大阪事務所 第3事業部 マネージャー

鈴木 智博

人との出会いが道を拓き会計士として成長させてくれる

○ Interview 04 13

PwCあらた有限責任監査法人 テクノロジー・エンターテイメント部
シニアマネージャー

黒田 武志

状況を的確に整理し、ポジティブに捉える

○ Interview 05 17

有限責任監査法人 トーマツ 監査・保証事業本部 第三事業部 パートナー

藤春 暁子

どんなに大変でも、笑顔で。その先に、成長があるから。



会計を木の幹に、 実りある大きな枝葉を広げて 好奇心と探求心を原動力に 自分の可能性を広げてきた



有限会社アキュレイ 代表 / 東急不動産ホールディングス株式会社 社外取締役 / 大日本住友製薬株式会社 社外取締役
新井 佐恵子 Saeko ARAI

昭和女子大学グローバルビジネス学部・教授。公認会計士。日本企業女性初CFO。会計監査及び税務業務に従事した後、IT系のベンチャー企業を共同創業者と起業し、CFO管理本部長として経理、総務、人事システムを一から構築、事業計画、資本政策、資金調達等に携わり、設立3年後に東証マザーズ第1号上場を達成。ホテルウェディング業、環境エネルギー業等のCFO及び取締役、顧問等を歴任。米国デューク大学経営学修士(MBA)。現在、有限会社アキュレイ代表、東急ホールディングス株式会社、大日本住友製薬株式会社社外取締役等、多方面で活躍中。

監査法人での勤務を経て、ベンチャーへの参画や大学の講師、社外取締役など多彩なキャリアを重ねられている新井佐恵子さん。日本企業ではまだ人数が少ない“女性CFO”として脚光を浴びるなど、多方面に輝き続けてきた新井さんの歩みと“これから”について話を伺った。

公認会計士を目指した きっかけ

一まずは、公認会計士を目指したきっかけからお聞かせいただけますか。

高校の時に父から勧められ、そこで初めて公認会計士という資格を意識しました。父は当時としては珍しく「女性でも仕事を持ったほうが良い」という考えを持っていて、その影響は大きかったですね。高校生でしたから、公認会計士がどういう仕事なのか明確ではありませんでしたが、将来的に受験してみようと考えていました。

実際には就職活動の時期になって本格的に公認会計士の勉強を始めることになったのですが、当時、業界はいわゆる“売り手市場”にあったので、公認会計士試験に合格する前から研修生として外資系の監査法人に内定をもらうことができました。ところが、その年の会計士試験には合

格できず、本格的に監査業務を開始することになったのは、翌年に合格してからとなりました。

一どうして外資系の監査法人を選んだのでしょうか？

先輩に誘われ、アルバイトとして入ったのがきっかけでした。「面白そう」と漠然と思って行ってみたら、監査法人の雰囲気が感覚的にしっくりきました。あとは「いずれは海外に行きたい」という思いもあって、外資系であればそういったチャンスがあるのかなという期待もありました。

ところが実際に入所して仕事を始めてみると、周囲には英語ができて優秀な人ばかりいて、ドメスティックな仕事に追いやられてしまったと感じていました。最終的には国内のIPO部門に配属となったのですが、そこで「企業の上場を支援したい」という思いが芽生えるようになりました。

一そもそも、どうして海外に行きたい？

中高生の頃は英語が得意だったんですよ。ところが大学に入ってからあまり英語に触れなくなって、さらに外資系監査法人に入ってから、熱心に取り組むことはありませんでした。実は、少し後の話ではありますが、アメリカのMBAへ進学することになって、友人に話をしたらみんなが口々に「夢が叶っておめでとう」というのです。

私自身はすっかり忘れていたのですが、高校生の時から「海外に行きたい、MBAを取得したい」という話をしていたみたいで。漠然とした憧れはあったのでしょうか。

一監査の業務に従事されてみていかがでしたか。

監査の仕事は自分に合わないと感じていました。ルーティンワークが得意ではないのもあります。監査はルーティンをこなしていかなければならない仕事ですからね。もちろん、監査業務の経験は確実に、その後の私の重要なスキルになっていくのですが、当時はどうしても苦手意識を拭うことはできませんでした。

それで、私は入社1年目にもかかわらず、当時の上司に監査の仕事をつまらない」と伝えました。上司は「どうして面白くないの？」と聞くのです。それで理由を述べたら「だったら、面白くしてみれば？」と言われ、衝撃的だったのを今でも覚えています。

それをきっかけに「どうやったら面白いか自分で考えればいいんだ」と悟り、監査を面白く感じるようになりました。「これは何のためにやっているのか？」と考えられるようになり、その後の仕事の質に大きく影響したと思います。

それから5年ほど監査法人で過ごしているうちに、次のキャリアを考えるようになり

ました。そこで浮かんだ選択肢は3つ。1つ目が企業内でCFOとして活躍すること、2つ目が独立して企業の会計顧問、3つ目は中小企業向けの経営支援でした。

いずれかの道に進むにせよ、まだまだ知識も経験も足りないと感じていたので、小規模な会計事務所で税務業務を経験することにしました。税務業務は、個人的な感覚ですが3年ほど経つとひととおり経験できることもあり、ひととおり経験したあとに、また次に何をしよう?と考えることになります。

会計も税務も、企業の外から見る経験は積んだので、次は「企業の中から見てみたい」という思いが芽生えてきました。当時はまだ、日本には終身雇用のマインドが蔓延していて、途中で入社するのであれば外資企業に入るのが良いだろうと思い、MBA取得のための留学を目的に、学校に通いました。

その時期に「インターネットの会社を立ち上げるので来ないか」と誘われました。当時はまだ社員が7人しかいないようなスタートしたばかりのベンチャー企業。ちょうどインターネットの黎明期にあったため、仕事はすごく先進的で面白く、当時のCEOが「MBAに行きたいなら3年後、ウチが上場したら行かせてあげるよ」と約束してく

れ、共同創業者として参画を決めました。その会社で女性CFOとしてマザーズ1号上場を達成。MBAは実際には無理だろうと思っていたら本当に3年後に上場して、アメリカに行かせてもらうことになりました。

子会社の立ち上げに伴って、ニューヨークにオフィスを構えることになり、その立ち上げ当初から参画し、CFOやCEOを務めました。

“超”がつくほど好奇心旺盛

—MBAではどのような知識を獲得しましたか?

普通のMBAというよりは、役員一步手前の方が学ぶ“エグゼクティブMBA”に入りましたが、日本と違って文系理系の垣根がないのが特徴で、会計や金融関係者だけでなく、歯医者など、多様な人とディスカッションができたことは財産になっています。

また、経営判断のための検討事項を全部数値として指標化し、意思決定を行う授業が展開され、アメリカ式ビジネスの根源的な考えに触れることができたのも興味深

かったですね。もともと個人主義が強い国だからこそ、チームで取組む課題も多く、日本人と世界各地から集まった人たちとの考え方の違いを目の当たりしながら学ぶことができました。

そもそも私がMBAで学びたかったのは「どういうロジックで交渉するとうまく行くのか」「他国の人はどういう風に考えているのか」だったので、そういう意味では非常にマッチしたと感じています。

MBA修了後、アメリカに残ってバイオベンチャーのエクイティファンドの設立準備を進めていましたが、ちょうどリーマンショックが起こり「この時期にファンド設立はリスクであろう」と断念。それと同時に以前からお世話になっていた方が「IPOを手伝ってほしい」と声をかけてくださったので、日本に帰ることにしました。

—新井さんは、本当にいろいろなチャレンジをされますね。

“超”がつくほど好奇心旺盛で、何でも首を突っ込んでしまう。とにかく人に会いたくなるし、珍しいモノはこの目で見に行きたくなるのです。興味の分野も広いし、ネットワークも軽い。日本国内だったら、興味があるところにはすぐに向きます。

大学での教鞭と 社外取締役を兼務

—現在は、どのお仕事を中心に活動されていますか?

今は大学で教鞭を執る傍ら、社外取締役として数社に関わらせていただいたり、さらに年金積立金管理運用独立行政法人(GPIF)の委員にも名を連ねております。それに加えて、中小企業支援にも取り組んでいまして、経理だけでなく議事録を書いたり、労基関係、補助金の申請から上場の経験を活かしたお手伝いも行っています。原価計算やシステムのパッケージ導入支援や工場の方に工業簿記を教えたりもしますね。とにかく現場の仕事が大好きなんです。



—最近の学生さんはいかがですか？

学生はかわいいですよ。みんな素直です。私が学生に伝えているのは「考える人になってほしい」ということ。大企業に進むにせよベンチャー企業に勤めるにせよ、自分の生き方を自分で選べる人間になってほしいと願っています。

私が一方的に喋る授業ではなく、学生同士でディスカッションしてもらっているのもそのためです。特別講義で社会人を呼んで話をしてもらうこともあります。みんな積極的に質問をしますね。意欲とか自分の考え方を引き出せるような授業を心掛けています。

—社外取締役は？

現在は、製菓会社、不動産会社、小売業系のクレジットカード会社の社外取締役を務めております。企業価値を高めるために、それぞれの会社に貢献していく方法について、日々模索しています。The International Corporate Governance Network (ICGN) や実践コーポレートガバナンス研究会等に所属して、意見交換しながら研鑽に励んでいます。

そもそも日本の企業の社外取締役は微妙な立ち位置にあると感じていて、なかなか立場や職掌が確立していないのが現状ではないでしょうか。日本はこれまで企業内部で完結してきましたし、そこに社外の人に関わることで自体が新しいコンセプトになりますから。

その一方でアメリカなどでは、CEO以外はすべて社外役員という会社が多いです。比較すると「日本はこれで大丈夫か？」と不安になることもあります。でも、私に声を掛けてくださった企業は、業界そのものが変革を強いられていて、インクルージョンという意味を含めて、「外の声」を欲しがったのだと思います。

これから活躍する 女性たちのために

—これまで様々な分野で活躍してきた新井さんだからこそ実感する公認会計士資格の魅力とはどのようなものでしょうか。

やはり“経営の原点”ではないでしょうか。今までのキャリアを通して、公認会計士として行った監査業務の視点は、仕事をする上で基盤となりました。コーポレートガバナンスにおいても、会計士の知見は不可欠なものです。こういった流れは今後ますます加速するでしょうし、影響力も強くなると思います。

—今後の新井さんのビジョンをお聞かせください。

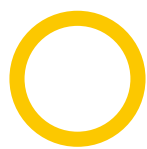
今、私が社外役員として意欲的に臨んでいるのは、「私が踏み台になろう」という覚悟の表れです。先駆者として、公認会計士資格を持つ女性だけでなく、女性幹部にとっても、少しでも歩きやすい道を切り拓いていきたいと考えています。自分が置かれている状況をどう全うしていくべきかが、これからの私のフォーカスポイントになります。後輩に門戸を広げ続けるためにも、日々、発信していきたいと思っています。

—ありがとうございます。それでは最後に、若い公認会計士の方々へのメッセージをお願いいたします。

公認会計士の資格自体は本当に大きな広がりを持っていると思っています。学生にも、「将来どうしよう？と悩むなら公認会計士資格を取得することを選択肢として入れるべき。公認会計士ならこんなこともできるよ」と伝えていきます。

公認会計士に限った話ではありませんが、自分ですぐに限界を作らないで、若くときこそいろいろなことにチャレンジしてほしいなと思います。自分で“これダメかも”って思ってしまいがちですね。限界を作らず公認会計士としての自分の可能性を広げていただきたいですね。

このインタビューは2018年8月10日に実施されました。



“アドベンチャー会計士”の 冒険の旅

～専門性が未来の可能性を広げる～

EY新日本有限責任監査法人 マネージャー
財務会計アドバイザー
(Financial Accounting Advisory Services :FAAS)
Japan Business Services (JBS) 海外デスク インドネシア担当
内藤 玄太郎 Gentaro NAITO



2006年新日本監査法人(現EY新日本有限責任監査法人)入所。自動車関連業界を中心として電機、アミューズメント業界等の上場及び法定監査に従事するとともに、IFRS導入支援サービスにも携わった後、2014年よりアーンスト・アンド・ヤング インドネシアに出向。インドネシアの会計監査、税務申告など法定サービスのほか、税務、ビジネス・リスク、M&Aや事業再編に関するアドバイザー業務のサポートに従事。2018年にEY新日本有限責任監査法人に帰任し、財務会計アドバイザー (FAAS) 部門においてPost Merger Integration (PMI) や新会計基準の適用支援等に従事。Japan Business Services (JBS) 海外デスクインドネシア担当。

スキーの国際インストラクターから公認会計士へ大転身。内藤玄太郎さんは、常に海外で仕事することを意識してきた、異色とも言える経歴を持つ。監査法人でのキャリアスタートから7年、念願の海外勤務を叶えた“アドベンチャー会計士”の冒険の旅をリアルに語っていただいた。

インストラクターから 公認会計士へ転身

—公認会計士を目指したきっかけから教えてください。

実は私、前職がありまして。元々はスキーのインストラクターをやっていたんです。新潟のスキー場で国内の資格を取り、当時から海外志向も強かったので、国際資格を取得するため、スキー発祥の国オーストリアやニュージーランドでも仕事をしていました。諸事情で続けることができなくなり、何かフィールドを変えて、違う専門性を身につけなくてはと思ったときに、たまたま選んだのが公認会計士でした。会計に興味なかったわけではありませんが、特に好きということもなく、なんとなく選んだというのが正直なところ。大学の専攻は心理学でした。会計は大き

な意味では文系ですが、数字があり、基準があり、ルールがあって、専門的で、多少理系の要素もありますよね。そこが面白いかな、とは思いました。

公認会計士になるなら資格が必要、ということで、まず専門学校に通いました。入学当時は会計のことなどまったく知らず、「貸借」の意味さえ知りませんでしたから(笑)、ゼロからのスタートでした。なんとか2回目の挑戦で合格できたので、本当に嬉しかったですね。合格したときは、心底ホッとしました。

この資格は一般的に、大学で会計学を学び、在学中に試験にトライして合格し、3年生、4年生の時には卒業後の進路も決まることが多いでしょうから、私の



パターンは極めて異色だと言えるかもしれませんが、なにせ、公認会計士を目指したのは社会人になってからです。

—現在の監査法人に入所されたきっかけは？

そもそも、学生時代から公認会計士を目指していたわけではなかったもので「どのファームに入ったらいいか」という知識もあまりありませんでした。EY新日本に入所したきっかけは、「人との出会い」です。ある日、知人の紹介で、EY新日本の方に話を伺う機会があり、その方と話しているうちに「ここがいいな」と。決め手は人との繋がりででした。

—入所されてからのお仕事は？

2006年に入所して、最初に従事したのは監査でした。右も左もわからない状況で、目の前のクライアントにフォーカスしてという日々でした。監査は、ざっくり言えば、毎年この時期にこれをやって、期末になればこれをやって、ある程度終わるとまた同じ作業の繰り返し、という業務です。慣れるまでの時間はすごく面白く、自分の理解が深まっていくのが楽しかったですね。自動車業界のクライアントを担当したので、監査の業務を重ねていくうちに、業界の専門的な知識も増え、それが海外に赴任する際に大いに役立ちました。

初の赴任先は 赤道直下の群島国

—海外赴任は希望されて行かれたのですか？

若い頃からずっと海外で仕事をしたいと思っていました。海外に出るなら、何の仕事をしよと考えた結論が、スキーでした。ほぼ1年中スキーができる環境を求めて、北半球のオーストリアと南半球のニュージーランドで仕事をしました。そこで、英語もある程度習得することができました。公認会計士になってからも、変わらず海外に出ることは意識していました。監査部門で7年ほど経った頃、所内の海外赴任の募集があり、迷わず手を挙げました。海外に出られるなら国はどこでもよかったのですが、人気の欧米諸国はやはり競争率が高く、比較的倍率の低そうなインドネシアを希望しました。

—インドネシアでのお仕事はいかがでしたか？

インドネシアには、EYのJapan Business Services (以下:JBS) の一員として赴任しました。チームは私を含め3名で、20年近く現地で働くベテランの方と私と同じ

ように日本から赴任した税務の専門家の方。インドネシアに進出する日系企業に対して、会計や税務についてアドバイスをする、監査のクレーム処理をする、といった業務でした。どちらかといえば、アドバイザリーサービスに近い業務ですね。クライアントも千差万別で、案件もまったく違う。そういうところは面白かったです。また、監査だけでなく、色々な業務にも携わることができました。インドネシアは成長著しい国です。ビジネス機会も多く、日系企業の進出意欲も旺盛です。新しい事業が起ち上がったたり、企業活動は日本より活気に溢れていますね。

—インドネシアで学ばれたことは何ですか？

赴任して最初の失敗は、結果的に「上から目線」での仕事になってしまったこと。クライアントの親会社からの要求をそのまま忠実にクライアントに伝えた。それ自体は正しいことなのですが、提案の仕方が拙かったため、上位下達で指示するような感じになってしまい、相手の反応がとても悪かった。一般論ではありますが、相手を理解し、認め、立てると喜んでもらえるし、仲間として受け入れてくれる。そんな環境を作ると、いろんなことが進めやすくなります。この失敗から、「相手のいいところを引き出し

つつ、こちらの要求ものんでもらい、みんなであらうと。向こうが困ったことがあれば、ひとつでも手助けしよう。」そうした意識で仕事をしていくように変えました。インドネシアの人々は「我々こそASEANの盟主」と考える傾向があり、それなりにプライドも高いので、それを無視して事務的に行うと、なかなか上手くいきませんよね。

また、「情報はタダではない」。こちらがお願いしたいこと、欲しい情報があれば、相手にもプラスになることをきちんと用意することが大切なんだ、と実感しました。いわば“Win-Win”の関係。失敗を経験してからは意識を変え、相手を認めて、立てながら仕事していくことでクライアントとの関係性が深まっていきました。インドネシアでは、簡単なことがうまくいかず、心が折れそうなきもありません。そんなときに自分に言い聞かせていたのが、“Nothing is ever easy.” 何事も簡単じゃない、という言葉でしたね。

—インドネシアと日本の違いを感じられたのは何ですか？

時間ですね。インドネシアには“ゴム時間”というのがありまして、時間が好きなように延びるんです。例えば期限。日本だと期限に厳しいじゃないですか、ここまでに絶対終わってくれ、と。でも、インドネシアでは、最初に期限の合意をしても、期限が相手の好きなように延びるんです。それを管理するのはとても大変でした。延びるけど、絶対縮まない(笑)。もうひとつ、日本のチームと現地のチームの板挟みになるのも辛かったですね。現地は「できない」と言い、日本からは「どうしてできないんだ」とくる。クライアントからなかなか資料が出てこないとか、できないなりの理由があって、その板挟みになるのは本当に大変でしたね。

あと、インドネシアはTwitter数が世界一。携帯依存症っていうぐらい、スマホを使っています。コミュニケーションツールも、メールだとなかなか返信がこないのですが、チャットだとすぐ返ってくる(笑)。監査の現場でも、彼らはスマホを絶対手放さ



ない。日系企業からすると、そういう態度はプロ意識に欠けると見てしまいがちですが、彼らの流儀であって、悪いとは思っていないんです。

監査の考え方は国によって異なります。アジアの上場会社のうち、BIG4の監査を受けている割合はインドネシアとベトナムが低い。社会主義のベトナムは別にして、インドネシアは企業の透明性に対する意識がそこまで高くありません。監査法人が小さければ小さいほど、会社がパワーを強く持っているということで、上場するときはBIG4に頼むけど、上場後は中小の監査法人に変更し、好きなようにやっているのが実情です。インドネシアの透明性に対する意識や資本市場における意識を世界のレベルまで持っていくのは並大抵のことではありません。会計において、シンガポールは世界の最先端を行っているとありますが、ASEANの中でも、国家間の格差は感じます。

一言の問題はいかがでしたか？

基本は英語です。スキーマのインストラクター時代にある程度話せるようになっていましたから、言葉で苦労したことはありません。言葉に抵抗がないと、コミュニケーションに対するハードルは低くなります。また、会計というのは“世界言語”です。数字という共通記号があり、言葉ができるかどうかは別にして、同じ世界の話ができるのは大きい。テクニカルチームは難しいかもしれませんが、現在は、国際会計基準(IFRS)にどんどん収斂してきており、たとえ英語が話せなくてもなんとかなる、というのが私の感覚です。英語があまり上手じゃない人の方が、英語に頼らない分、現地の言葉の習得が早く、現地にずっと馴染めますし、仕事上も仲間として受け入れてくれるので、距離はぐっと縮まります。私自身、新しい言葉を学ぶことは好きです。出来るだけ、現地の言葉を学んで、話そうと心がけました。実際、駐在中にかなり話せるようになりましたよ。

インドネシアでの暮らしをお聞きしてもよろしいですか？

インドネシアへは、家族と一緒に赴任し



ました。治安もそれほど悪いこともなく、昼間なら一人で出歩くこともできます。ただし、運転手付きの車で移動するのが基本ですから、日本のように自転車に乗って近くまで出かけるということができないので、その点は多少面倒でした。ジャカルタには日本人学校がひとつしかなかったこともあり、祭りやイベントを通して、駐在員同士のつながりはすぐにできました。駐在員の子供達は入れ替わりが頻繁にあるため、それは当たり前なこと、来る人はみんな仲間という意識が強く、子供は喜んで通っていました。生活自体はモノも揃いませし、元々多民族国家ということもあってか、オープンな雰囲気の中で暮らすことができました。駐在はその街に暮らすので、日本からの観光旅行ではほとんど訪れることがない、地元の人しか知らないような素晴らしい場所に行けるのも、駐在の醍醐味といえるでしょう。

スペシャリティを活かしつつ これからも冒険を

一帰任されてからのお仕事についてお聞かせいただけますか。

4年間のインドネシア駐在を終えて2018年に帰任し、現在はFinancial Accounting Advisory Services(以下:FAAS)のメンバーとして、財務会計のファイナンシャルアドバイザーを務めています。インドネシアでの経験を生かせる専門家として、今でもインドネシアに仕事に関わっています。駐在時代のインドネシアは企業買収の案件が多く、そこに関わったことが現在に繋がっているとと言えますね。海外で新しく会社を買ったとき、その新しい会社を本社のオペレーションに合わせる、特に会計面で合わせるという作業を日本で行うわけですが、現地サポートに関与した経験を活かし、帰任後はそのチームで仕事させていただくことになりました。

FAASのメンバーではありますが、並行して、海外の日系企業を支援するJBSのインドネシア担当デスクも務めており、年に3、4回はインドネシアに出張します。インドネシアの日系企業やインドネシアに進出を検討している企業向けに、進出するときの会計・税務・現地で企業活動していく上での会計・税務に関するアドバイスを提供しています。

日系企業でよくあることですが、買収する際にあまり専門家を関与させたりしません。「自分達でなんとか評価して買って



しまおう」という傾向があります。このため、買ってから、「こんなはずじゃなかった」という齟齬は割と起こりやすいんです。インドネシアは特に、財務情報が取りにくい国で、帳簿も“表、裏、本物”と3つの帳簿があるという具合なので、「こんなはずじゃなかった」とならないよう、私達のような専門知識を持ったアドバイザーがいればかなりお役に立てますよ、と言いたいです。

一内藤さんの未来予想図は？

JBSは各国にデスクを持っており、駐在から戻ってきた者がそれぞれ担当しています。現地からの様々な質問を、日本側で対応しています。現在は、インドネシアを担当しているので、さらにインドネシアを極めたいなど。また、将来的にはもう少しエリアを広げて、『ASEAN全域の専門家』になれば、と考えています。一度海外に出るとなかなか次の駐在に出にくくなりますが、機会があればまた挑戦したいですね。ASEAN以外であえて挙げるなら、ロシア

かな。ロシアって全然言葉が違うじゃないですか！知らない土地で全く新しい言葉や文化に触れながら、仕事をしてみたいという気持ちを持っています。

一ありがとうございます。最後に、公認会計士を目指す学生にメッセージをお願いします。

海外に出るなら、やはり専門性がとても大切です。当然、公認会計士としてのベースは必要ですが、そのほかに何を、どんな分野を専門にしているか、を自分でアピールできるかどうか重要です。私は監査時代、自動車業界のクライアントがメインで、海外勤務を志望した際のアピールポイントも「私は自動車業界に強いです」でした。実際、インドネシアでの日本車のシェアは約95%。赴任してみると、クライアントは大体自動車業界に関わっていたので、「自動車のことなら私にお任せください」と自信をもって言えたから、仕事のやりやすさは、他の人と比べて全然違ったんじゃないかと思います。監査にしろ、税務にしろ、

会計のどの部分をやっても、「これが私の専門です!」と言えるぐらいになれば、どの国に行ってもうまくやれるし、後のキャリアに役立つと思いますね。怖がらずに、とにかく海外に出てみることをお勧めします。

このインタビューは2019年8月1日に実施されました。



人との出会いが道を拓き 会計士として 成長させてくれる

有限責任 あずさ監査法人 大阪事務所 第3事業部 マネジャー
鈴木 智博 Tomohiro SUZUKI



2008年あずさ監査法人大阪事務所入所。ソフトウェアメーカー、繊維商社、通信事業会社、レジャー産業等の監査に従事した後、IFRS、決算早期化、M&A関連アドバイザー業務に携わり、2015年にKPMGバンコク事務所（タイ）に赴任。日系企業支援部隊の一員として、監査、会計、税務、法務、その他アドバイザー等の業務に従事し、2016年にはKPMG ホーチミン事務所（ベトナム）へ。現地日系企業に対する投資、会計、税務、法務等のコンサルティングに従事し、2019年あずさ監査法人大阪事務所に帰任。現在はグローバル製造業の金商法/会社法監査、外資系企業のリファード監査、ベトナムへの進出・ビジネス拡大に関するアドバイス、リクルート活動、IFRS等を担当。

母校の先輩との出会いをきっかけに、公認会計士の道へ。監査法人へ入所後も、出会った上司や先輩に導かれるように海外赴任へ。鈴木智博さんは、人との出会いを大切に、「一期一会」の精神を大切にプロフェッション。常に明るく前向きに取り組んできたという、公認会計士の仕事の面白さを語っていただいた。

高校生でなろうと決めた 公認会計士

一公認会計士を目指そうと思われたきっかけを教えてください。

中高大一貫校に在籍していた高校生の時に、大学の説明会で公認会計士の先輩がいらっちゃって、その方の話から公認会計士という職業があることを知りました。公認会計士は、色々な人と出会う機会に恵まれている、職業としての幅があるなどの話を聞いているうちに、面白そうだなと思ったのがきっかけです。

なかでも特に惹かれたのは職業としての幅の広さです。公認会計士になって、会計事務所に入ったとしても、将来の道の選択が広い。例えば、ある事業会社のCFOになる道もあるだろうし、自分で事務所を開設する、大学の先生やアカ

デミックな分野に進むという道もあるでしょう。他の資格や職業と比較して、選択肢の幅があるというお話を聞いて、公認会計士を目指したいと思いました。その先輩自身も「公認会計士になって楽しい」と仰っていました。

一公認会計士試験のための勉強は大変でしたか？

高校生の時点で既に公認会計士になろうと決めていたので、エスカレーター式に大学の商学部に進学しました。大学ではバスケットボールにも打ち込んでいましたが「相当勉強しないと公認会計士試験に合格出来ないぞ」という話も聞いていたので、専門学校にも通いました。大学の授業に出て、専門学校に通って、その合間にバスケットボールをやるという生活でしたから、勉強時間を確保するのが大変で、何度もくじけそうになりました。でも、専門学校で同じ年代の人達と友達になり、先輩達と知り合ってグループで勉強したりしながら、「将来、公認会計士になったら何をしようか」と、夢を語って支え合える仲間がいたことが、モチベーションの維持につながったと思います。そのかいもあって、無事、大学時代に公認会計士の試験に合格することができました。

一あずさ監査法人を選ばれたきっかけは？

一言で言えば“風通しの良さ”でしょうか。関西に生まれ育って、当時はあまり外に出たくないなという思いもあったので、あずさの大阪事務所に入所しました。2006年に公認会計士試験に合格したあと、まだ大学生でしたが、非常勤という立場で監査法人に所属し、監査の現場に携わることができました。卒業してから正式に採用され、私の公認会計士としてのキャリアが本格的にスタートしました。公認会計士と言えば、まず監査業務ですが、監査業務が好きかと聞かれると、作業そのものについては「はい、好きです」とは言い難いです（笑）。でも、色々な所に行けたり、多くの人達と会って話ができる機会があることは「好き」ですし、満足しています。

一監査業務で印象に残っていることは？

海外に行きたい、英語を勉強したいと思ったのは、入所5、6年目の頃。クライアントと一緒にベトナムとフィリピンに出張する機会があったのですが、その際に上司から「一人で行って来い」と言われました。クライアントが国際財務報告基準（以下：IFRS）をグループ全体に適用しようとしていた時期でした。現地に着いてから、IFRSについて概要を説



税務や法務、アドバイザーなど、違うサービスラインを広く見えています。「海外のオフィスや海外のクライアントの社長からは、この広い視点が評価される。公認会計士は幅広く色々な視点を持つことが大切なんだ」と気づかされました。もちろん、監査調書などの作成も重要なことですが、そこだけに注力するのではなく、もうちょっと視野を高くもって、社長と話したり、問題事項に関して相手と会話してソリューションを導き出すなど、そういうコミュニケーション力、いわゆるアンテナの高さがとても魅力的に映りました。

一赴任先にアジアを選ばれた理由を教えてください。

アメリカやヨーロッパは成長している市場ですし、仕事も監査業務のラインの一部というイメージがあります。言語を日本語から英語に置き換えただけで、日本と海外という自分のおかれた環境は変わりますが、業務内容はさほど変わりません。それに比べて、タイやベトナムは、もう少し幅広く仕事ができるということもあり、2015年にタイ、2016年にベトナムに赴任しました。アジアは伸びていると言われていましたし、激動というか、ごちゃごちゃしたというか、そういう成長途中の世界を経験してみたいと思いました。実際、アジアに赴任されているクライアントも、製造業や営業といった、いわゆる前線に立つ方々が多い。こういった方々と一緒に歩みながら、会社の成長を考えていく仕事をしていきたいというのもアジアを希望した理由のひとつです。大学の時も、入所した時も、特別、海外に行きたいとは思っていなかった私ですが、色々な方々から「3年に一度ぐらいは自分の置かれている環境を無理やりでも変えたほうが良い」「目線を1段階、2段階上げたほうが良い」とアドバイスをいただいたことで「あえて別の環境にチャレンジしてみよう」と自分なりに前向きな意識も働いたのかもしれない。

明するセッションがあり、私がおその役を担当しました。当時はほとんど英語が話せませんでした。台本は上司が用意してくれて、スライドも全部英語で事前に作成しました。時間にして20分ぐらいだったと思いますが、そのおかげで何とか無事にプレゼンテーションを終えました。ところが、私のプレゼンテーションを聞いて、現地のクライアントは「この日本人はなかなか英語ができるな」と思ったようで、セッション後の会話になると、怒涛の英語でのディスカッションが始まり、私はほとんど英語が喋れなくて黙ったままでした。今の自分の英語レベルの低さと海外で働くことの具体的なイメージに衝撃を受けました。この体験がきっかけとなり、海外で働くために英語の勉強をしよう、と強く思うようになりました。この一人で行った出張が監査業務の中で一番印象に残っています。今の自分がある、今の自分の原点となるような出来事でしたから。

外への関心は全くなかったです。周りはグローバル化の時代に合わせて「公認会計士もグローバルな人材にならなアカン」と言っていました。まるで他人事のような感じで、自分に当てはまるとは思っていませんでした(笑)。ただ、そうこうしているうちに、自分が海外出張や、海外駐在から帰って来た上司や先輩と一緒に仕事をする機会が多くなり、海外に興味湧いてきました。

それに加えて、パフォーマンス・マネージャーの後押しもありました。パフォーマンス・マネージャーは実際の業務とは関係なく、社員のキャリアアップを一緒に考えてくれるような専任者ですが、海外経験がある方で、ことあるごとに「海外に行った方がいいよ、鈴木くん。海外は面白いよ!」と言ってくれました。そうした方々との会話や経験をお聞きすることが増えていく中で、次第に海外への興味膨らんでいったという感じです。

一海外経験された方々をどんな風感じていましたか?

魅力的でしたね。楽しそうに仕事をやっているな、と。公認会計士というと、特に監査チームの若手は「一日中パソコンに向かってキーボードを叩いているイメージ」ですが、海外帰りの方は他の人と視点が違って、監査だけではなく

海外赴任先に選んだのは アジア

一海外で働くことへの憧れはありましたか?

正直、大学時代も入所してから、海

—ふたつのアジアで学ばれたことは何でしょう？

アメリカでもヨーロッパでも同じかもしれませんが、「日本ではこうやっている」「日本人はこう考えている」「日本では当たり前」というのは、絶対に禁句です。タイ人にしろ、ベトナム人にしろ、彼らには彼らなりに思うところがあって、それを尊重しながら仕事を進めていくことが重要です。彼らがどう思っているのかを考えて、「こういう方法ならこんなメリットがありますよ。どうですか？」という感じで話すことが、海外では必要だと思います。

ベトナムのKPMG ホーチミン事務所では様々な国の方が働いていました。トップがニュージーランド人で、次席がオーストラリア人。その他にドイツ人、インド人、韓国人、台湾人がいて、かなりインターナショナルな雰囲気でした。ナショナルリティによって当然性格が全く違うし、怒るツボも違う。仲良くなる方法も、議論の詰め方も千差万別。ミーティングも、雑談から始めた方がスムーズに進む人もいれば、いきなり本質から入った方がいい人もいます。そういったバラエティに富んだ環境で多くの人達と仕事できたのは、本当にいい経験になりました。ベトナム人でも育ちがアメリカだと、生粋のベトナム人とは氣質が違ってりして、面白かったです。余談ですが、オフィスでは英語が基本ですから、ベトナムの街中でもある程度英語が通じると思いますよね？ でも、タクシーに乗るとほぼ9割方英語は通じません。これはカルチャーショックでした（笑）。

一期一会の心がまえ

—プロフェッションとしての大切なことは何でしょうか？

「一期一会」という言葉がありますが、公認会計士として、人との出会いはとても大切にしています。海外に行ってから特に思ったことですが、ずっとお付き合いのあるクライアントでも新しいクライアントでも、その人と会う機会は実は少ないのだな、と。クライアントの数が多すぎて、1年に1回しか会わない人もいれば、もしかすると、一生に一度しか会わない方もいるかもしれない。だから最初にお会いするときは、万全を期して準備もするし、その場で極力本音を引き出せるような付き合いができないか、と常に思っています。まさに「一期一会」です。相手を好きになるのもひとつの方法かもしれませんが、相手を嫌ってしまうと表情に出してしまうものですし、それ以降のお付き合いに支障が出ると思うので、苦しい時であっても相手のことを思いながら考えるようにしています。

—海外での一期一会、英語力は必要でしょうか？

私の場合、海外志向があったわけではないので、全く英語の勉強はしていません

んでしたが英語を学ぶひとつのきっかけとなったのが、法人内の英語研修でした。外部の講師をお招きして、週1回の割合で半年間程度のスピーキング中心のレッスンに参加し、その後、入社4年目、26歳の頃に、社内制度のニュージーランド語学短期留学に行きました。高校生や大学生に混じって1カ月弱学校に通い、学校が終われば、ホームステイ先のファミリーと一緒に食事をするという生活でした。英語が身についたのは、このニュージーランド短期留学で外国人の友達ができたことが大きいです。彼らとのコミュニケーションを通じて、それなりに英語が上達しました。アジアの人は、第一言語が英語ではないので、私を含め、お互いにペラペラと喋れるわけではありませんでした。となれば、英語という言葉に頼る以外に、「この人なんか面白そうだな」とか、そういう印象を持ってもらった方が、相手が自分の話を理解してくれようとするので、片言の英語でも通じる場所があると思います。個性があれば、相手が理解してくれようとするので、多少文法や単語の使い方が間違っても、十分にコミュニケーションすることができますので、怖がらず、ですね。

—今後のキャリアで何を目指されますか？

クライアントにしろ、同僚にしろ、人





と人とを繋ぐハブの役割を果たせる、そんな人材になりたいと思います。海外経験はしたものの、まだ4年だけです、その間に知り合った人との人脈をもっと広げていきたいです。そうすることによって、自分の仕事の幅も広がるし、スピード感も上がり、より大きな仕事もできる。クライアントからビジネスパートナーとして信頼されるような存在になりたいです。もちろん、あずさ監査法人というバックグラウンドがあつてのことで、単に監査だけしている人ではなく、「鈴木さんがいるから仕事をお願いしたい」とクライアントから指名されるような存在になりたいです。この人に頼めば、様々なビジネスの観点からアドバイスをしてくれるし、困ったときに相談すれば解決策が見つかるかもしれない、つまりオーディター（監査担当者）ではなく、ビジネスのパートナーでありたいです。そのためには、専門知識や、各国とのリレーションなど、まだまだ足りない部分がたくさんあります。国内外問わず、色々な所に行つて、多くの人と会つて、もっともっとチャレンジし続けること。これは今後の私のキャリアにとって、最も大切なことだと肝に銘じています。

—最後に、若い公認会計士の方々へのメッセージをお願いいたします。

自分のやりたいことを見つけて、ぜひ

チャレンジして欲しいです。やりたいことを見つけるには、色々なところに足を運んで、多くの人のお話を聞くことが必要です。私は「できるだけ明るく、前向きに」をモットーにしてきました。振り返ると、辛いこともたくさんありましたよ（笑）。人間ですから上手くいかないこともあります。辛くて大変な時でも、「笑つて仕事ができる、生活ができる」ようになっていって欲しいですね。英語が苦手だから海外に行けないという考え方は捨てた方がいい。海外でしか得られない経験やそこで培った人脈は、自分の人生にとって、とても大きな財産になるはずですから。

このインタビューは2019年8月19日に実施されました。



状況を的確に整理し、 ポジティブに捉える

PwC あらた有限責任監査法人
テクノロジー・エンターテイメント部 シニアマネージャー

黒田 武志 Takeshi KURODA



2000年システムコンサルティング会社に入社。エンジニアとして業務効率化や標準化の開発・運用に携わったのち、2006年あらた監査法人（現 PwC あらた有限責任監査法人）へ入所。アソシエイトとして TMT チームに所属し監査業務に従事しながら、2007年 2次試験合格、2010年に公認会計士の資格取得。2013年に3カ月間、PwC オーストラリアのメルボルン事務所に短期出向後、2015年から2018年までの3年間 PwC ベトナムのハノイ事務所に駐在。2019年に PwC あらた有限責任監査法人に帰任し、現在は会計監査、上場支援、会計アドバイザーなどを担当。

会計監査の世界に活躍の場を移した、工学部出身の元システムコンサルタント。公認会計士として新たな道を歩み続ける黒田武志さんは、どんな状況にもポジティブに向き合う、異色のプロフェッション。資格挑戦から海外駐在まで、これまでの公認会計士としてのキャリアを振り返っていただいた。

一念発起して 公認会計士の道へ

一転職のきっかけと公認会計士を目指された理由は？

大学は、会計とはかけ離れた工学部の出身。卒業・就職の際も、コンピュータに興味があったので、システム系のコンサルティング会社を選んで就職しました。エンジニアとして業務効率化や共通化、標準化のためのプログラムを組んだり、サーバーを構築したりしていました。好きな仕事ではあったのですが、今後のキャリアアップを考え一念発起し、経験も活かしつつ、転職で新たなキャリアを構築していこう、と考えるようになりました。

転職するにあたって色々考えましたが、やはり「何か資格を取ろう」と思いました。元々数学が好きで、数字には興味があったので、公認会計士という資

格は比較的取り組みやすかったのかなと。「数学→数字→会計」という発想です。まあ、実際に勉強を始めてみて、それは大きな誤解だったと気づかされました（笑）。

一受験勉強は大変でしたか？

数学や理科の世界は、公式があってそれに当てはめていきますが、会計は「基準を人が作る」ので、時代や国によって少しずつ内容が違ってきます。もちろん原則はありますが、ディテールまですべて覚えないと正しくできません。数学のように公式に当てはめれば良いのであれば、少しは応用が利くのかなと考えていましたが、そんなことはなく、かなり覚えることが多くで大変でした。ただ、数学好きとしては「統計」だけは数学そのままです。それ以外は基本的に全部想定外でしたね。

また、公認会計士になろうと決心した頃は、ちょうど結婚を予定していた時期でしたので、妻と何度も話し合いを重ね「仕事を辞めて受験勉強に専念する」と決めました。辞めた当初の1年間は「会計士浪人」のような暮らしで、1次試験に合格するまでは決して順風満帆とはいきませんでした。妻にはかなり負担をかけたと思いますが、支え続けてくれて本当に感謝しています。

一PwC あらた有限責任監査法人を選ばれた理由は？

前職では、色々なシステムを構築するにあたって「効率化」がとても重要な要素でした。業務の標準化やテンプレートなど共通部分をいかに効率的に構築していくか、がテーマのようなものだったので、その経験を会計の世界でも活かしたいと考えていました。PwC あらたのような大手監査法人は規模が大きく、業務上のツールも共通化がかなり進んでいて、監査ツールも世界共通のものを使っています。そういう世界規模で標準化を進めている環境に身を置くことができるというところに興味がありました。

入所の際は、1次試験、今で言う短答式試験に合格した時点で入りました。本試験（論文式試験）に合格したのは、その翌年。法人の支援を受けながら資格取得ができたので、とてもラッキーだったと思います。

難易度の高い目標に向かって

一入所後のお仕事は？

試験勉強をしていた時代は「会計の世界はこうだろう」とみたいな勝手な思い込みがありましたが、PwC あらたに実際に入って仕事をしてみたら、かなりロジ



公認会計士として持つべき倫理観は大切にしていますが、自分自身が特別「正義感が強い」とは思っていません。不正を見つけたい、と言ったのは、そのハードルが高く壁が厚いから。難しいことほど、やり遂げたいと思うタイプなので、ゴールが目に見えない方が、テンションが上がったり、モチベーションが高くなったりするのかもしれない。不正を見つけるという、公認会計士としてもっとも難易度が高い目標を掲げて、それを成し遂げる。それが、のちに監査人生を振り返った時に大きなイベントになるのかなという、漠然とした想いです。

海外で働きやすい 会計士という仕事

—海外勤務を希望されたきっかけは？

日本は“世界の中では特殊な環境だ”という思いがあったので、「機会があれば他の環境も経験したい」とずっと考えていました。「どこでもいいから海外経験がしたい」ということで、入所直後から海外駐在に手を挙げていました。最初は、短期出向でオーストラリアのメルボルンに。オーストラリアは6月決算ですので、7月からが期末の決算シーズン。そこで期末監査のサポートをしていました。3カ月の短期出向でしたが、現地企業の監査チームに入って、2社程担当しました。

日本に帰ってきて、2年程度経った時、今度はPwCベトナムのハノイ事務所に赴任しました。特にベトナムをピンポイントで希望していたわけではないのですが、たまたまハノイ事務所で1人空きが出るということで、行かせていただきました。PwCあらたに入った時から「海外経験ができる」ことは、この法人で働くメリットのひとつとっていたので、それを活かすことができました。

カルに仕事が進められていて、いい意味で裏切られて衝撃を受けました。入所してからアソシエイトの3、4年間は、仕事は基本的にすべて監査業務でした。上場支援もありましたが、それも監査業務の一環と考えれば、ずっと監査です。PwCあらたの監査部門は、主に金融を担当する部署と金融以外の企業を担当する部署に分かれています。私は入所以降、一貫してTMT（テクノロジー・メディア・通信）チームに所属しています。自動車や化学といったいわゆる製造業ではなく、電機メーカーのエンターテインメント子会社や、ヨーロッパの通信機器メーカーの日本販売法人とか、そういった企業の監査を担当してきました。長い間監査業務に携わっていますが、通常の監査だけに従事してきた訳ではありません。IFRS（国際会計基準）導入支援のアドバイザー業務や、プロスポーツリーグの財務アドバイザーとして各チームに財務的なアドバイスをする仕事も担当し、監査以外の、監査周辺業務も行っています。

—前職の経験は監査業務に活かされていますか？

前職では元々システム開発的なことをやっていたのですが、それに近い業種であるオンラインゲームや半導体の企業の監

査を担当しています。クライアントのビジネスに関する知識も比較的多く、経験は活かされているなど感じます。

また、監査ツールに関しては、グローバルでも日本でも、かなり力を入れて開発しているところですよ。少し前の時代ならエクセルのマクロなどを使わなければなりませんでした。最近ではITの進化もあって、PwC全体でITスキルを高め、共通化されたツールを使って業務に取り組むことができます。私も最近研修を受けたばかりですが、プログラミングのスキルがなくても、ツールを使いこなすことによって業務がスムーズになります。今後は積極的に業務に取り入れられればと思っています。幸い、私にはシステム開発の経験がありますし、より仕事に有効に活かせるのではないかと考えています。

—仕事のやりがいは何ですか？

入所当初のアソシエイトの時代から変わらず、自分の中に、常に「不正を見つけたい」という目標があり、この目標達成のために努力してきました。会計処理のミスには「誤謬」と「不正」があって、意図的ではないミスが「誤謬」で、それは割と簡単に見つけられるんです。意図的な「不正」についてはまだ見つけられていません。

ーベトナムでの業務を振り返ってみていかがですか？

ベトナム・ハノイでは、ジャパンデスクのメンバーとして駐在しました。監査業務がメインではなく、営業活動や日系企業に対するエンゲージメントのフォローというものがメインでした。ベトナムでの業務は、税務の仕事が約65%、監査が約20%、アドバイザーが約15%。日本では監査部門に所属していましたが、ベトナムではバックオフィスとして、個別のサービスライン（「税務」「監査」「アドバイザー」など）には所属せずに、各サービスラインを横断的に把握し、営業活動をサポートしていました。PwCではxLoS（Cross Line of Services）と言いますが、お客さまの課題に応じて部門や組織の壁を越えてx（協働）していこうという考え方です。

現地での主な仕事はふたつ。ひとつは仕事を取ってくる、あるいは提案のタネを見つけて、それをチームに伝え提案をまとめてもらい、それを成約につなげていくという業務。もうひとつは、現地監査チームと日系企業のクライアント間でつなぎ役になり、例えば監査レポートの要約を伝えたり、あるいはクレームに対応したり、色々な場面でエンゲージメントのフォローアップをすることでした。

赴任前は、日本とはまったく異なる環境での仕事に対して、正直あまりイメージが湧きませんでした。いざ行って仕事してみると非常に楽しかったです。普段、日本でやっていた仕事とはまったく違う、例えば税務やアドバイザーなども経験できました。日本に比べると、ベトナムは全体的にまだ税法基準が曖昧なところがあり、税務当局の担当者の裁量に任されているところが結構あって、税務リスクという点では安定性にやや欠けています。進出した日系企業も、そうした税務環境に課題を持っており、我々のビジネスチャンスもそこにあるので実際にそういう企業に対してサポートし、うまくいけば喜んでもらえます。事務所内の各部署のマネジメントや現地クライアントの社長とも接点を持つこともできましたし、日本ではあまり経験したことがない初めてのことがばかりでしたが、異なる価値観の中で仕事ができただけ、刺激的で面白い経験でした。

ーベトナムという国をどう見ていらっしゃいますか？

とにかく「元気がある」という一言に尽きますね。若者が多く、伸び盛りだと思いますが、仕事面でいうと、経済規模が日本と比べるとまだまだ小さく、GDP

比で5%くらいです。ある程度規模のある大きな企業でも、日本からの受託生産企業や、労働集約型なところが多いように思いました。クライアントも大部分が製造業でしたが、それらが持っている機能も日本やシンガポールなどと比べるとシンプルな場合が多いです。だからこそ税務・アドバイザー等の経験が少ない私にも取り組みやすかったのだと思います。

また、ベトナムの人は基本的に親日です。日本人も結構たくさんいます。まあ、韓国人はその10倍いますが（笑）。ベトナムの人は韓国も日本も好きなので、私たちにとっては過ごしやすい国でした。ベトナム人を評して「謝らない」とか「時間を守らない」とか、色々な言われ方をしますが、私が出会ったベトナムの人たちは他のアジア諸国と比べてもしっかり働きますし、器用でした。友達もできたし、私は好きでしたね、ベトナムは。

ー公認会計士として海外で働くために必要なことは？

海外は当然、言語や文化が違います。では、なぜ現地で様々な貢献ができるかというと、“日本でやってきた会計や監査の知識があるから”なんです。日本で





も海外でも、公認会計士のいちばんのウリは、“会計や監査のスキルがある”ということ。国が変わっても、そこは変わらないものです。PwCの世界共通のツールが使えるという環境もありますが、公認会計士として持っている会計監査のスキルを自分の武器にすれば、海外で活躍できる。専門知識や経験を活かす場があることを、ベトナム駐在で実感しました。英語は最低限でできればいい。専門知識こそが最も重要だと思います。

—もう一度、海外で仕事をするとしたら？

またベトナムに行きたいですね（笑）。何年後かに、同じ国に行くのも面白いかなと。ただ、そのときにニーズがあるかどうかですが、ベトナムの事務所にジャパンデスクが必要なのは、日本の企業文化と現地PwCのそれとにギャップがあるケースが多いためだと理解しています。

日本流に細かいところまで手を抜かず仕上げていく、というやり方は現地では一般的でないことも多く、そういうトラブルを回避するための緩衝役、というのはジャパンデスクの付加価値の一つです。現地の日系企業がローカルのやり方を受け入れるようになれば、ジャパンデスクはそのうち必要なくなるのかもしれない。

ません。そうならないうちに、「チャンスがあればもう一度ベトナムへ」という気持ちは持っています。

—若き公認会計士にメッセージをお願いします

PwCあらたに限りませんが、現在の監査業務は世界共通のツールを使ってやっています。言語自体は日本語と英語で違いますが、作業自体は変わりません。今は、会計基準もほぼ世界共通です。一般企業であれば、それ相応の英語力が必要でしょうが、公認会計士の場合は専門知識を持っていれば英語は最低限でも構わない。そういう意味では、公認会計士の方が海外で働くハードルは、多分かなり低いと思います。これから公認会計士を目指す学生の方や、資格を取って歩み始めた若い公認会計士の方は、積極的に海外に出られたらいいのではないでしょうか。

このインタビューは2019年8月22日に実施されました。



どんなに大変でも、笑顔で。 その先に、成長があるから。

有限責任監査法人トーマツ 監査・保証事業本部 第三事業部 パートナー
藤春 暁子 Akiko FUJIHARU



2004年に公認会計士試験に合格しデロイト トーマツ グループの主要法人のひとつである有限責任監査法人トーマツに入社。グローバル製造業の会社が主な担当クライアント。2015年より、デロイト タイにて2年間赴任。2019年7月にパートナーに就任。

工学部出身のいわゆる“リケジョ”。公認会計士として働き、海外赴任も経験。現在はパートナーとなり、幹部としてのキャリアを歩み始めた藤春暁子さんに、資格挑戦から海外駐在、女性公認会計士としての夢、仕事をするうえで大切にしていることなど、様々なお話をお伺いしました。

科学から会計の世界へ

一公認会計士を目指された時期や理由を教えてください。

私は大学が工学部でしたが、「将来は何か資格を取って働きたい」と考えていて、在学中に公認会計士という資格を知り、試験勉強を始めました。色々な資格がある中で公認会計士を選んだのは「数学は得意だし、会計は数字を見ていく仕事だから、それを活かせるかな」、「理系の強みが活かせる資格なら、公認会計士だろう。」という、学生にありがちな単純な発想からでした。簿記などはわかりやすかったですが、会社法や民法などは「我ながら頑張ったな」という感じです。大学の授業とは大分かけ離れていましたが、違和感なく勉強できました。私が学んでいたのは量子力学ですが、難しいものではありません。流体力学の基礎を学ぶもので、プログラムを作り Enter キー

を押して、待っていると結果が出てくる。それを何回も繰り返シミュレーションしていくといったものでした。その結果を待っている時間などを会計の勉強に充てていました。大学4年生で合格し、卒業後は現在のトーマツへ入社しました。

一入社後はどのようなお仕事をされていたのでしょうか？

大学でいわゆるITに関係するような勉強をしていたためか、トーマツでは、監査の部署ではなく、IT専門家、IT系の部署に配属されました。そこでは、監査業務とIT業務を半々でやっていました。監査業務の中でITに関係する内部統制をみたり、企業のIT部署の方々に「どんな内部統制がありますか？」とインタビューをしたりもする仕事でした。

そして入社2年後、「公認会計士の仕事全体を俯瞰したい」と考えたので、監査の部署に異動しました。監査の全体を俯瞰しながら仕事できるのが、とても楽しかった記憶があります。私がチームのメンバーとして担当していたクライアントは、海外にも多数拠点を持っているかなり大きな製造業でした。金額的にも規模的にも重要な拠点を海外に持っていたので、日本だけでなく、海外子会社の監査チームともコミュニケーションする必要がありました。しかし、入社2、3年程度ではコミュニケーションを積極的にとれず、難しさも感じていました。まだ

若かったですし、ビジネスの全体像は見えづらく言葉の壁もあったので、上手く仕事ができなくなるまでは、結構苦勞しました。そもそも監査のこともまだよく分かっていないのに、海外の監査結果をあだ、こうだと議論なんてできませんよね。「監査とはなんぞや」「どういう手続きが必要で、何をすべきなのか」ということを自分なりに勉強して、みっちり監査の知識を増やしていきました。そうこうしているうちに、海外のメンバーと現地でもやり取りする機会もいただけるようになりました。

一英語はどのように学ばれたのですか？

海外志向を持っていたわけではありませんが、大学の授業や試験に必要な資料など、英語のものも少なくなかったので読み書きはある程度勉強していました。ただ、スピーキングはやはり難しく、苦勞しました。その時のスピーキングのレベルは、「帰国子女レベル」ではなく、一般的な平均レベルのスピーチ力でした。大学の勉強の中でやっていたことが、業務に使うためのツールとして必要になったという感じです。

2015年、コーディネーターとして赴任したタイでは、現地メンバーとの会話は基本英語だったので、やり取りする中で、スピーキングを磨いていきました。難しかったのは「こちらが伝えたいことをうまく伝える」ということです。現地

のメンバーには「こうした方がいいのでは？」という意見を受け入れてもらい、動いてもらわないといけない。「これはだめ」「こうなさい」と否定したり命令したりするのは簡単ですが、それでは相手は動いてくれません。どういう言い方で、どうケアをして、いかに動いてもらうか、表現も含め、現地での仕事を通じて次第に英語力が身につけていったと思います。

「海外駐在する」ということ

タイ駐在はいかがでしたか？

2015年から2017年の2年間、駐在しました。入社当時から携わっていたクライアントの子会社が何社もタイにあった関係で、現地の監査チームからも「来て欲しい」とリクエストをいただき、赴任することになりました。赴任に際して、不安はそれほどありませんでした。というのも、実は駐在前に、社内の短期プログラムでタイに2週間、シンガポールに1週間行く機会があったからです。そこで出会ったタイの現地メンバーは優しく、バンコクの治安もそんなに悪くない、と感じていました。行く直前に爆弾

事件があったりもしたのですが、まったく問題はありませんでした。向こうでは女性の公認会計士も多かったので、居心地が良かったです。男性に限らず、女性の中にも「日本に帰らずそのまま永住したい」という人も少なくありませんでした。事実、日本に帰らず現地に会計事務所を開業し、移住されている方もいらっしゃいました。私見ですが、「大手に頼むほどではないけど、困っているから何とか助けて欲しい」という日系企業はそこそこあると思うので、現地で仕事ができるくらいの需要はあるのではないのでしょうか。

駐在時の仕事は、監査チームに入らずコーディネート業務が中心で、私1人で約80社程度の会社を担当しました。数が数なので、1社にかけられる時間は限られてしまうため、それぞれにどうやって時間を割くかを考えるのは、想像以上に大変でした。それでも、コーディネート業務の枠を超えて、現地の日本人マネジャーの様々な相談に乗ったり、会社の課題解決につながりそうな税務あるいはコンサルティングサービスを紹介するといった業務にも、積極的に関わりました。

監査される側のクライアントに対してサポートするのは当たり前ですが、会計監査関連の日本語と英語の通訳や、監査

の論点をアップデートしたり、難しい論点を分かりやすく説明するといったこともこなしました。例えば、海外の日系企業の場合、経理をバックグラウンドとしない方が社長として赴任されているケースもあり、「これはこういう意味です」と説明するのは重要な仕事でした。そういう流れの中で「税務のことで困っている」、「こういうところを改善したい」、「こんなことがデロイトでできないか」など、会計監査以外の相談をいただくことも多く、それに対して提案をしていく業務は日本ではできない貴重な経験でした。

タイで印象に残っていることは何ですか？

一番の思い出は、タイで一緒に働いていた監査チームが、デロイト アジアパシフィックの年間アワードを受賞したこと。東南アジアで最もリーダーシップがとれているということで、タイのメンバーが表彰されたんです。そこでいただいた盾を、「この賞は、日本からあなたがやって来て、うまくコラボレーションできた結果だから」と私にプレゼントしてくれたんです。本当に嬉しかったですね。今でもいただいた盾を大切にしています。

女性としての仕事、その価値観

今、公認会計士の仕事はどう変わってきたと思われますか？

私がトーマツに入社した当時は、最初の1年目はコピー取りやデータ入力など「考えずに手を動かす」、下積みの作業が多くありました。今はこうした作業はせずに「上がってきた結果を判断する」という業務の方向に変わってきています。データ作成については格段に効率的になり、時間の無駄もない。その分、公認会計士として短期間でステップアップができ、成長できると思います。「単純作業の中にも学べるものがある」という方も



いらっしゃいますが、私は公認会計士としてデータ入力から学ぶことはなく、アウトソースが簡単にできるものや、機械で対応可能なところは使えばいいと思います。私たちの時代の人間が経験したような事務作業をやらずに成長できるのは、若手にとっていい環境だと思います。ただ、作業などに必要だった時間が短くなり、求められる判断レベルもスピードも上がるので覚悟をちゃんと持っていた方が良くかもしれませんね。

一女性として、公認会計士の仕事をどう捉えていますか？

私は、海外駐在の際、夫を日本に置いて単身で行きました。夫は「無期限で行かれると困る」と冗談交じりに嘆いていましたが（笑）、女性単身でも海外での仕事に挑戦しやすいのは、公認会計士の魅力のひとつかもしれません。公認会計士は、業界の制度や仕組みの変化など、流れをキャッチアップしなければならぬので、長期間海外に行っていると、アップデートされた日本の状況のキャッチアップが難しくなります。だから、長くても4年くらいで戻ってくるのが一般的です。期間を決めて挑戦できて、日本に戻って来られる。加えて、社会と身近にいるクライアントの役に立っている、というモチベーションも代えがたいものだと思います。今はパートナーになったばかりで忙しいですが、落ち着いてくれば家族とのプライベートの時間をもっと持てるようになると思います。今は、シニアマネジャークラスになると仕事の負担が大きくて、「私にはできません」という女性もまだいますが、そこを改革するのは業界全体の課題ですし、それができれば確実に女性も増えていくのではないかと思います。幸い、女性の社会進出やライフステージに合わせた仕事環境の改善という意味では、今トーマツは先頭を切って取り組んでいると思いますし、公認会計士を目指している若い女性たちが現場に入る頃には、もっと良い環境になっているのではないのでしょうか。いず



れにしても、公認会計士は「女性に向いている職業だな」と思っています。

一最近パートナーになられたとのことですが、やりがいは何ですか？

この7月にパートナーに昇格しました。それまではシニアマネジャーの立場で、監査先の現場の取りまとめをやっていましたが、今は現場の取りまとめをしているメンバーと一緒に方向性を決めていく仕事になりました。まだパートナーになりたてなので、やりがいは何かなどを考える暇もなく、新しいステージでの業務に翻弄されている感じです。「どうしたらもっと良くなるだろう」と、毎日悩みながら仕事に向き合っています。シニアマネジャー時代のように、どうしても現場感覚で細かく管理しがちになるので、意識的にそうならないように、俯瞰でモノを見る、考えるようにしています。また、パートナーになったことで私個人の時間単価はすごく上がりました。その分「私はそれに見合う価値をどのように提供できるだろうか」と自問自答しています。クライアントの役員や管理職の方と話をすることが一番の仕事になってきますので、その期待に応えていく、向き合っていくことが今の私の課題であり、少しずつでも結果が出せればやりがいに繋がるはずだと思っていますところ。

一仕事をするうえで、大切にしている価値観は何ですか？

「どこでも楽しく働く」というのが一番大事なことだと思います。楽しくなければ、働く意味もありません。ただ、楽しくというのは「辛いことがない＝楽しみたい」という意味ではありません。「目の前の仕事にしっかりと対峙して、苦闘しながら働き、成長したい」という価値観は、入社してからずっと変わりません。これまでも、大変なことをひとつひとつ乗り越え頑張っていくプロセスを楽しんできました。仕事で色々辛いこともありましたが、「辛そうな顔をしている人と一緒に働きたくない」という思いが私の中にはあって、常に笑顔を忘れずに仕事することを心がけてきました。特に、タイにいた時はいつも笑っていたので、笑い声が聞こえないと現地のスタッフから「大丈夫？」と言われたりもしましたね（笑）。ポジティブでないと厳しいです、この仕事は。

(次頁に続く)



若手公認会計士たちへ

—若い公認会計士がいま身に着けるべきもの、知っていた方がいいことは何かありますか？

公認会計士は監査報告書を出すということを最終的かつ最低限やればよい仕事ではありませんが、「とりあえず監査基準に書いてあることさえやればよい」ということではないと思います。自分たちがやった業務で、ビジネスパートナーであるクライアントが良い方向に変わっていくことがやりがいに繋がると思いますし、そこに向き合いながらやっていくのが重要です。それは基準からだけでは学べませんし、経験だけでもありません。若手の公認会計士にはぜひ、クライアントと対話しながら、気づきを伝えていくとか、違和感を伝えていくといったことを毎日意識して仕事をしていただきたいと思います。

—若手の公認会計士、これから目指す学生にメッセージをお願いします。

監査は今、かなり変化してきています。その真っ只中にある私もよく分からないくらいのスピードで様々な変革が起きて

いますから、「今まで求められてやってきたことをそのまま同じようにやればいい」というのではなく、柔軟に対応しながら一緒に仕事をしていく仲間が増えたらいいな、と思います。公認会計士は監査報告書を出すだけが仕事ではなく、やりがいのある、幅広い、奥行きのある仕事だと感じていただきながら、公認会計士という資格の価値を私たちと共有してもらえたら、嬉しいですね。

このインタビューは2019年9月12日に実施されました。



日本公認会計士協会

The Japanese Institute of Certified Public Accountants

〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1

TEL:03-3515-1120(代表) 03-3515-1130(国際グループ)

<http://www.hp.jicpa.or.jp/>